

『復活物語』の理解をめぐる-聖書の読み方へのチャレンジ(2)

新井 美穂

はじめに

キリスト教にとって、これがなくてはキリスト教が成立しないという中心的出来事は、イエス・キリストの十字架の死と復活である。イエスが実在の人物であるか科学的に証明することが可能であっても、そのことはキリスト教成立の根拠にも信仰の確信や保証にもならない。しかも聖書自身がイエス・キリストの復活を「たわごと」と言う言葉で表している¹⁾。イエス・キリストと生活を共にし、直接教えを受けてきた弟子ですら信じる事が難しかったイエス・キリストの復活という出来事を初代教会の人たちはイエスの十字架の死と結び付け、信仰と生活の中心に据えてきた。教会は、理性によっては納得しかねる伝承を 2000 年来信仰告白の内容としてきた。即ちそれは十字架で殺され、三日後に復活したイエスこそがキリスト即ち救い主(メシア)であるという事である。この事をあらゆる信条は、「三日目に(死者のうちから)復活し²⁾」という言葉で宣言ないし告白してきた。

本稿において、キリスト教の土台である復活について、信仰共同体である教会ではなくて、信徒養成の場でもない学校という現場の宗教教育において、相互主体的学びはどのように可能なのか、また課題について検討したい。方法としては、特にここでは初等教育の事例を取り上げ、実際の授業の振り返りを通して、更に理論を踏まえつつ、初等教育、中等教育に限らず広

く宗教教育における相互主体的学び³⁾において共通して必要なものは何かを自己検証を含め検討したい。

I 実践的報告

小学3年生の復活に関する気づきに触れる

一授業実践を通して

実施校は、祈祷書による礼拝(校庭又は教室で行われる毎朝の礼拝及び金曜日のチャペルでの礼拝)と週に1時間の聖書の授業を行っているキリスト教主義の学校である。聖書の時間はお祈りで始まり、お祈りで終わる。イースター、収穫感謝祭、クリスマス、入学式、卒業式、始業式、終業式、パウロ回心記念日に行われる創立記念日など節目になる教会暦や行事において全校礼拝を行っている。

〔1〕イエス・キリストの復活に関するカリキュラム

①聖書科の授業以外での取り組み

復活については、1年生から6年生のどの学年においても聖書の時間に限らず、音楽の時間では復活に関する聖歌を学び、礼拝に参加する準備を行うなど他教科⁴⁾でも必ず4月に取り上げている。

このような準備があって、全校で守るイースター礼拝がある。特に1年生は礼拝そのものが初体験であり、入学後初めてイースター礼拝を体験する事になる。イースターの場合、礼拝が

執行される講堂の祭壇は生徒の持ってきた花々で飾られ、いつもとは違う礼拝形態になっている。また礼拝後にはイースターエッグが6年生から1年生へプレゼントされる。1年生にプレゼントするイースターエッグを入れる箱は、2年生が生活科の時間に作成している。主イエスの復活をお祝いする礼拝であるが、春を待つお祭りでもあるイースターには、新入生を歓迎する思いも込めて準備がなされている。

イースターに限らず、先述した全校で奉げる特別な礼拝は、プロセッションチーム⁵⁾と聖歌隊による奉仕がなされる全校礼拝である。生徒自身が礼拝奉仕者として礼拝に参加する事で、大人が導き生徒が受身で参加する礼拝ではなく、生徒が主体的に関わり大人と協働で作りに上げる礼拝⁶⁾の姿がここにある。

②聖書科の授業

取り組みの一つとして、イースターを迎える心の準備としての「大斎はげみ表」⁷⁾と「大斎克己献金」⁸⁾がある。「大斎はげみ表」は、生徒全員に配布する。次年度の初めに「大斎はげみ表」を回収し、聖書科の担当者が見た後、その年度の大斎節が始まる直前に返却する。

〔2〕授業の概要

- 1) 単元名：イースターについて
- 2) 指導学級：小学3年生（男子のみ）
- 3) 使用教材：新共同訳聖書
- 4) 目標：イエス・キリストのご復活の物語に親しむ。
- 5) 指導計画 4月のテーマ：ご復活のキリストに出会うということ
- 第1時 オリエンテーション及びイエス様

のご受難（復習）

第2時 イエス様のご復活（ヨハネによる福音書）「マグダラのマリアとイエス様」

第3時 イエス様のご復活（ヨハネによる福音書）「疑うトマスの心とイエス様の心」
1学期の終わりに絵と作文及び知識を問うテストをもってまとめとする。

6) 授業者：新井美穂

今回は、実践報告としてこの内の第3時を取り上げる。

〔3〕授業の実際

A. 4月の授業

（導入）

ヨハネによる福音書20章19～29節の箇所を印刷し配布。

この物語から考えたいことをプリントにして提示し配布。

プリントの内容は以下の通り。

- ①弟子たちは何故戸に鍵をかけたのか（その時に弟子たちの気持ちを考える）
- ②戸に鍵をかけるとは、私の何に鍵をかけることか。
- ③戸に鍵をかけるとは、どういう意味か（何を言おうとしているか）
- ④イエス様の手や脇腹の釘跡を自分で確かめなければ、イエス様のご復活を信じない！と言った時のトマスの気持ちはどんなだったか。
- ⑤八日後にご復活のイエスさまに出会ったトマスは、どのように変わったか。またあなたがそう考えた理由。
- ⑥疑っていたトマスに、イエス様が伝えたかっ

たことはなにか。

参考までに

トマスはどんな人か考えましょう。弟子たちの中でも、イエス様の前でも自分の居場所がないと思っている自信のないさびしい心をトマスは抱えていたのではないかと思います。

プリントに書かれた事を意識しながらみんな聖書を群読。

読んだ後、ご復活のイエス様はどんな時に出会って下さるのかを今日は考えてみたい旨伝える。

－以下は生徒たちのとの会話－

（展開１）

教師１（以下Ｔとする）：イエス様が十字架で殺された後、何故お弟子さんたちは鍵をかけて家の中に隠れていたと思う？

生徒１（以下Ｓとし番号をつける）：ユダヤ人が怖かったんだと思う。

Ｓ２：そうそう、イエス様みたいに殺されるのが怖かったんだと思う。

Ｓ３：殺されるのがイヤだって思った。

Ｓ４：僕はイエス様をおそれたんだと思う。みんなイエス様を裏切ったから。

Ｔ２：不安とか怖いとか死ぬのがいやとかイエス様を裏切った自己嫌悪そんな気持ちがいっぱいある心を色で現すとどんな色？

Ｓ５（多数）：まっくら

Ｔ３：そうかあ真っ黒。そんな時イエス様が現れて下さったのね。光がない時、心が陰しい時、そんな時イエス様がシャローム平安あれ、平和あれ。という挨拶の言葉をおっしゃるんですね。もっと言うとかやあ元気？！ってかん

じかな。

Ｓ６：平和って、冷たい空気の中であつたかい感じするよね。

Ｓ７：イエス様ってけんかをしている時にも現れてくれるんじゃない？

Ｔ４：その通り！ここでトマスだけいないわね。なぜかしら。それに鍵をかけているけど、どこに鍵をかけているのかしら。

Ｓ８：トマスは家にいたくなくて出て行ったと思う。

Ｓ９：たぶんけんか。

Ｓ１０：家の戸に鍵かけているけど…たぶん家だけじゃなくて（言おうとする傍から）

Ｓ１１（多数）：心！

Ｓ１２：弟子たちだけではなくて、トマスの心のことじゃないかな。トマスは心を閉じている。トマスのいない時イエス様があらわれたんだから。

Ｔ５：トマスは一人ぼっちだったかな。トマスはなんて言っていた？トマスの気持ち想像しながら２５っていう数字のところ見てみましょう。何だって？

Ｓ１３（複数）：「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、またこの手をその脇腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

Ｓ１４（複数）：ひどいな。

Ｓ１５：トマスの気持ちわかるよなあ。

Ｓ１６（複数）：わかる。わかる。

Ｔ６：八日後どうなったでしょうか。さっきのプリント、聖書の２７節見てください。

（聖書にもう一度目を通し、今度は黙読する）

Ｔ７：トマスに向かってイエス様はなんて言っ

ている？

S 17 (複数)：「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、私の脇腹に入れなさい。」

T 8：「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、私の脇腹に入れなさい。」といわれたのは何故だと思う？

(展開2)

(ここで聖書研究に入る。単語の意味を説明する)

T 9：言葉の説明をします。トマスの言葉に釘跡って書いてありましたね。聖書の元の言葉は何語？

S 18 (複数)：ギリシア語

T 10：ギリシア語では釘跡の穴は単数形って一つを意味する単語が使われています。釘跡は一つ。一つの穴に打ち込まれた釘はどうか。これは複数形と言って、いくつもという一つ以上を意味する単語が使われていました。

T 11：次は入れてという言葉ね。ギリシア語使っちゃってごめんね。「バロー」という言葉が使われていて突っ込むって意味があります。

S 19 (複数)：えーイエス様痛そう。

S 20 (複数)：かわいそうだ。

T 12：今度はイエス様の言葉を見ましょう。イエス様はトマスに向かってトマスの指をどうしろっておっしゃっていたかしら。27節です。

S 21 (複数)：ここに「当てて」手を見なさい。

T 13：それだけ？

S 22 (複数)：あなたの手を「伸ばし」脇腹に入れなさいってあるよ。

T 14：27節に出てくる「当てて」や「伸ばして」というように、日本語は別々の言葉だけど、ギリシア語では同じ一つの言葉が使われています。どっちも「フェロー」が使われているの。この「フェロー」という言葉の意味は、ルカ (ルカ 23:26) では十字架を背負う、運ぶという意味で使われています。他の所 (ロマ 9:22) では我慢する、忍耐するという意味もあります。それから同じヨハネ (ヨハネ 15:1～8の実を結ぶ) では実を結ぶという言葉になって出てきます。みんなの好きな聖歌「主イエスは真のぶどうの木」はこの聖書の言葉を歌っています。「当てて」とか「伸ばして」は、イエス様につながるって言う意味もあります。さっきの質問に戻りましょうか。

S 23：トマスの心を開いてほしくて自分の傷を見せて、入れていいって言ったと思う。

S 24：トマスの心を治してほしいんだと思う。イエス様は…。

S 25：イエス様はみんなに信じてもらいたいんだと思う。

S 26：イエス様の傷あとに手を入れて、イエス様の苦しさを知りなさい、味わうということだと思う。

S 27：トマスの心の鍵穴はイエス様だから、トマスに手を入れろって言ったんだと思う。トマスの閉じた心の鍵を開けるには、イエス様が鍵穴で、自分の心を閉じた鍵はトマスの指だから、その指をイエス様に入れてトマスの心を開けろっておっしゃっていると思う。

T 15：トマスの指は、自分の心を閉じてしま

う鍵ですか。なるほどね。そうすると、その鍵は、トマスだけじゃなくて私達も自分で自分の心を閉じてしまう鍵だとも言えそうねえ。〇〇君（S27）はイエス様の傷の穴は鍵穴なのだというわけですね。イエス様の鍵穴に、トマスの鍵である指を入れるということは、自分の心の鍵をイエス様に預けて心を開きなさいということなのかしら。すごい事に気づいちゃったわね。そうかイエス様に自分で自分を苦しめる一切切を預けなさい、委ねなさいってことかな。そうやってイエス様に自分の重荷を預けて、それを引き受けてくださるイエス様の苦しみを味わうってことかな。みんな、すごいことに気づいちゃってない？！

それでは最後の質問。ご復活のイエス様に平安あれって言われて弟子たちはどうしたと思う？⁹⁾

S 28: (即答で) みんな笑顔になって、笑った (本人もニコニコ答える)

T 16: ご復活のキリストに出会って暗い悲しいしょんぼりが、ニコニコに変えられました。イエス様に出会って楽しいね。(終了のチャイム) では終わります。聖書係さん、お祈りをお願いします。(以下、祈祷。挨拶。)

B. 授業を振り返って

弟子たちが隠れていた理由として、イエスを十字架につけたユダヤ人を恐れたという意見が出され、賛同する生徒も多くいた中で、自分たちが裏切ったイエスを恐れたという S4 の意見によって恐れの内容に変化が起きた。自分の死の恐れから、裏切りというイエスと

の関係で気づかされた自分の弱さに対する恐れへの質的变化である。ここに実存的深まりの端緒が開かれた。一見唐突聞こえる S 6 の発言には、弟子集団の雰囲気冷たい空気と捉えており、自分たちの日常の中に起こる小さな裏切りを重ねあわせているようにも見えるが、そこから平和の持つ温かさを主眼にした発言には、前向きな力と発想が内包されていることを表している。それを受けて T 3 の発言をけんかという言葉を使って言い換えた S 7 の発言がある。これをきっかけにして、家にカギをかけて隠れていた弟子たちの話は、単に物理的な目に見える家だけでなく心にもカギをかけていたという話になり、生徒たちは一気に聖書の世界と自分たちの現実との距離を縮めていき、内面の世界へと話を転換していく事になる。このような捉え方の背景には、目に見える出来事の中に働いて目に見えない力について日頃から聞く機会が、礼拝を通して与えられているので、生徒たちには内面の世界について考える習慣が自然に身に付いている、という事が理由としてあげられるだろう¹⁰⁾。

しかしこのことは、諸刃の剣である事を自戒しなければならない。礼拝に影響力があるとなれば、キリスト教の価値観が、生徒の持つ価値観に対して不寛容な一方的押し付けになっていないか、私たちは常に自分を振り返らなければならない。そして生徒が客観的に批判精神をもってキリスト教について考える力を養うことができるように支え、またそのような機会を持たなければならない。加えて、教師自身が自分の中に批判精神を持ち、冷静で霊性な力を養う

必要がある。

授業の内容に戻ると、S 12の発言から心を閉じたトマスに焦点をあてて考える流れが作られる。仲間の発言を受けて、トマスへの関心が生徒たちの間に広がっていく (S14～16)。トマスの内面についての意見が出てくるチャンスを生徒から提供されているにもかかわらず、教師は生徒の反応を受け止めていない。ここでは対話が成立していないことがわかる。振り返って考えてみると、教師の側に聖書の世界から離れまい、聖書の世界に引き込もうとする思いが強すぎたため、生徒に聴こう、生徒から学ぼうとする姿勢が欠落していた。これは教師の一方的押し付けの傾向を示している。小学校の低学年の生徒は物語が大好きなこともあって、教師の態度よりも話の内容に関心があるので、ここでは中高生のような反発の反応にならない。だからこそ、自分の傾向に注意しておかなくてはならない。ここで取り上げた聖書物語は、彼らにとって初めて聞く話ではない。繰り返し礼拝で聞き、自分でも読んできた話である。それでも彼らは聞くことに飽きない。それは、彼らが知性や理性で教理の学びをしているのではなくて感性や霊性において物語を味わっているからではないだろうか。教師の無視とも見える頑迷な態度に生徒が歩みを沿わせてくれているこの場面は、教師の狭量さのみならず、大人を拒絶せず受け止める生徒の度量の大きさ、柔軟さ、豊かさを如実に表している。

トマスに対するイエスの言葉「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、私の脇腹に入れなさい。」に対する意見は、聖書の注解書にはない鋭い意見

が飛び出してくる。S 23以降の会話を見ると生徒たちの共通理解として、トマスの心が変わるために、主イエスはこの言葉を言ったという前提があることが確認できる。この共通理解は、主イエスがトマスを心配している思いへの気づきであり、それを一人一人の生徒が自分の言葉で伝えようとしている事がわかる。言い換えれば、それはかれらの主イエスに対する純粹な信頼を表しているということでもある。主イエスの傷跡に手を入れるということは、主イエスの苦しみを知り、味わう事だと考えたS 26の意見は、主イエスの苦しみへの共感がみえる。しかも言葉の説明を聴いて、日ごろ礼拝や生活の中で聞いているメッセージと結びつけて理解を深めていることにも驚嘆させられる。仲間の発言を受ける形でS 27の発言がある。トマスの心の鍵穴がなぜ主イエスなのかという説明はないが、この発言は、主イエスの言葉は、トマスが自分の心を閉じたカギである自分の指を主イエスというカギ穴に入れて、トマスの心を開けろという意味だとの解釈である。これは、主イエスがどういう役割・使命を担ったという方であるかという、所謂キリスト論を浮かびあがらせる示唆に富んだ気づきである。しかも言葉の用例の紹介で終わった教師の説明に対して、理念としての抽象的なイエス・キリストではなく、我々の悲哀や苦悩の一切を引き受けて、担ってくださるイエス・キリストをこの生徒は明らかにした。

この生徒の解釈には、キリスト論的なものばかりでなく、主イエスに対する私達のあり方までが含まれている事に教師は後になって気づかされる事になる。トマスの話を含むヨハネ福音

書の中に、イエス自身をあらわす特徴的な言葉に、「わたしは」で始まる言葉が出てくる。ギリシア語でいうと「エゴーエイミー」で始まる言葉である。その中に「わたしは門である。わたしを通して入るものは救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。」（ヨハネ 10 章 6 節）あるいは「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行く事ができない。」（ヨハネ 14 章 6 節）「わたしはぶどうの木、あなた方はその枝である。人が私につながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」（ヨハネ 15 章 1、5）というみ言葉がある。これらの聖句は主イエスとのつながりが言われていると今まで考えてきたが、生徒の解釈に触れて、これらは主イエスとの単なるつながりではなくて一致が言われていて、主イエスにおける一致の中で始めて人は本来の自己に目覚め、生き生きと生かされるという気づきへ導かれる端緒となった。

C. 6 月に提出された課題（作文と絵）に対する考察

上記の授業を行ったのが 4 月。6 月に入り課題に取り組む時間を設けた。3 年生になって礼拝あるいは聖書の時間に聞いたお話の中で心に残っている事を絵に表して感想を書くという課題である。この課題は、教理の理解度を確認するためのものではないので、考えてほしい項目は提示せず、生徒が感じた事を自由に書くことに主眼に置いた。

ここでは生徒たちの感想の中から復活をテーマに選んだ感想を取り上げ¹¹⁾、それらを項目

別に分類すると生徒の感想は、およそ以下の 9 個に分類された¹²⁾。

①トマスについて。②イエスについて。③トマス以外の弟子たちについて。④イエスが現れた時について。⑤戸にカギをかけることが意味することについて。⑥心にカギをかけることが意味するものについて。⑦イエスは何故ご自分の傷跡にトマスの指や手を入れてよいと言ったのかについて。⑧イエスの傷跡に指や手を入れることが意味するものについて。⑨疑問・感想、である。

トマスを作文で取り上げた生徒は、自分だけにご復活の主イエスに会っていないので怒ったり疑ったり信じないトマスを捉えている。トマスの怒りを激怒と表現しているものもある。泣いて怒り狂ったことが契機となってトマスは心の扉にカギをかけたと考えている感想もある。しかもトマスの怒りは自分のいない時に現れた主イエスに対して向けられるのではなくて、自分たちは出会えたと喜んでいる 11 人の弟子たちに向けられたと考えている点は鋭く、孤立するトマスへの気づきになっている。他には、トマスがみんなと一緒にいなかったのは、ご復活の主イエスの体を見るのが怖かったからとの推測もあった。これは幽霊を見る怖さではなく、主イエスに直接会うことの怖さを言外に含んだ意見で、人間関係の距離のとり方の難しさを感じている生徒の思いが伝わってくるようである。

信じないトマスを見出した感想は、主イエスのご復活を信じない、あるいは主イエスを信じないと考えた意見、仲間を信じないあるいは仲間の話を信じないとの意見が出された。また信

じないトマスは証拠にこだわったとの感想もあり、ここには現実感覚による理性的聖書の読み方がみられる。以上は主イエスに出会う前のトマスに注目したかれらの意見である。

一方で主イエスに出会った後の変容したトマスに関心を寄せた感想もあった。そこから見てくるのは、主イエスのおかげで信じる者へと心を開いて変ったトマスをやさしいとか良い人とかすごい人とり、その変化に対してよかった、ほっとしたといったトマスに対する肯定的意見や感情が見られ、トマスに寄り添う事の出来る感性が子供たちの中にあることが分かる。今回は詳述しないが、感性の豊かさは主イエスに対する記述にも現れている。

ことに、先に紹介した授業の実践報告の中で、授業者の心を感動させた意見を述べたS27の生徒は、2ヶ月後の作文では過去の自分の気づきを土台に、トマスの心の変容をパウロの回心と重ねて考え、トマスやパウロの心を変える主イエスのすごさや自分の心を変えた人間のすごさをつかみ、自分もそうなれたらと記述している¹³⁾。ここでは、ご復活の物語を通じて心の変容や自分について、関心が移行していることがわかる。自分を見つめる事への関心の深まりと見る事もできる。

また、この物語に対する2つの異なった反応を取り上げたい。一つには、指を傷跡に入れるところが気持ち悪いと感じている感想である¹⁴⁾。もう一つはこの話が面白い、好きだという感想と聖書は以外と面白いとの感想である¹⁵⁾。全く違う反応がでてくるところに聖書のもつ魅力や内容の豊かさの現れを見ることも出来るし、生徒が授業者の反応を気にしないで

自分に正直に自分の考えを大切に生きている姿を見る事も出来る。

ご復活の場面を絵で表現する時、多くの生徒は空(から)の墓の場面やイエス・キリストの手の傷跡を描く。生徒たちの感想に関する分類についての考察は今後の課題とし、ここでは一人の生徒の課題を取り上げたい。彼が描いた絵は、以下のものであった。中央に紫色の観音開きの扉が描かれる。扉は紫色で縁取られ、扉全体はやわらかいタッチの紫色で塗られている。扉の真ん中には、両方の扉にかかるように紫色の濃い線で囲んだ小さな丸がある。扉の周りは勢いのあるタッチで一面黒に塗られている。真っ暗な背景から、扉の中央の小さな紫で囲んだ丸に向かって、挿しこむように黄色い鍵が描かれている。

作文は「トマスが心にかぎをかけてしまって、かぎをあけるためには、イエス様のうでや、手の穴に手を入れなければだめだと言ったことになっていて、イエス様は、いいよと言って、トマスは、うでや手のくぎあとに手を入れた。イエス様は、やさしいと思ったし、ちょっとうでがいたそうでした。」と書いている。

D. 生徒同士での学びが持つ影響力

今回全く意見を言わなかった上述の生徒の絵は、扉の周りを黒く塗ることでトマスの閉じた心を表現している。戸に鍵をかけていた弟子たちの心に対する仲間たちの発言(S5)への同意が見てとれる。更に鍵を書き込んだ点では、イエス様の傷跡を鍵穴だと考え、トマスの指は自分の心を閉じた鍵だ(S27)と考えた仲間の意見に触発されたと見る事が可能である。

作文で彼は、トマスはイエス・キリストの釘跡に手を入れたと考え、このトマスを受け容れたイエス・キリストを優しいと感じている。聖書はトマスがイエスの傷跡に指を入れたかどうかについては記述していない。故に授業でもそこまでは言っていない。したがってトマスに関する結論は、この生徒がどこかで聞いたにしてもこの生徒自身の理解である。何故彼は仲間の言葉が響いたのだろうか。

以上を受けて、考えられる事をまとめてみる。一つには、生徒は生徒同士の関わりの中で、互いに影響し合い、自分と向き合っているということである。つまり生徒同士の相互主体的学びがなされていて、教室での出来事は彼らの人生にとって、芥子だね程の出来事であり、かれらの変容にとって、教師の指導性は必要ない。むしろ生徒一人一人の気づきに一緒に感動する事、共に疑問を解明する姿勢をもって解明の方法や情報を提供するための見守りと支えが教師に必要とされているのではないか。

さらに教師にとり大切な事は、生徒は何故このように表現したのか、このように考えたのかという問いと関心をもって、すぐに答えやヒントが見いだせなくても、生徒が感じているように感じよう、味わおうとする姿勢を失わず、その生徒に関心を抱き続け生徒と出会う事だろう¹⁶⁾。

今振り返ってこの時の生徒の絵から教えられる事は、闇に囲まれ閉ざされた扉は、主イエスに対しても仲間に対しても心を閉ざしたトマス表現したのみならず、周囲に対して心を閉ざす時がある自分の心をもそこに重ねていたかもしれないという事である。小学３年生は、思春

期にある子供たちのように自分を表現する言葉をたくさん持たずに反抗期を迎える。誰にも分かってもらえない寂しさや分かってほしい思いと寂しさを気づかれないくないプライドとの間を揺れ動きながら、心に嵐を抱えそれをまともにかぶりながら自分を確立していかなければならない。上手く言葉に出来ないもどかしさや悲しみが、怒りとなって仲間に手を挙げる形となって表れることもある。小学３年生ともなれば、悔しさで泣きたくなる事があっても、男の子はそのジェンダー故に、仲間の目も大人の目も意識して、学校生活の中で泣くわけにはいかないと、必死になって涙をこらえる。そして心の揺れを、人に悟られないように折り合いをつけて、静かに心の奥底にしまいこむ。この時子供たちは、幼少期の茫洋とした捉え方で感じる漠然とした不安や怖さを、自分ひとりの中にある孤独—それも自分だけが感じる寂しさとしての孤独—ではなく、人間存在の根源にある孤独として意識しているのではないか。今回の事例は、生徒のこのような中で表現されるかけがえのない自己の姿を、大人はもっと大切に受け取らなければならない、見過ごしてはならないとの思いを改めて喚起される出来事になった。子供たちの表現する自己に、そっと耳を傾けて気づく為には、何が大切なのだろうか。

Ⅱ 真理の前の協働探究者としてのありようを目指して

以上の失敗した実践を通して教師として何が必要なのか、まずはパウロ・フレイレの『被抑圧者の教育学』を手がかりに考える。彼はこの著作を通して、人間を客体として捉える発想か

ら生まれる垂直パターンの銀行預金型教育を凌駕する概念として、課題提起教育を提起した。後者は対話を通して、生徒と教師が互いに教えられると同時に教える者に互換する関係の中での認識・省察によって、「批判的共同探求者」として絶えず「現実世界にかかわっている（committed）者」との自覚を持つ新しい自分を発見し、世界に関わる存在となっていく創造的教育のあり方を提示した¹⁷⁾。

岩垣攝氏は、この対話型教育について論文の中でフレイレの理論に立って「教師と生徒は、認識対象の前では、完全に対等な立場に立つ『共同探求者』である¹⁸⁾」と指摘し、その具体的実践として、教師の役割は問題提起をする事であり、生徒と共に学ぶ主体となることだという。その際の教師の指導性として、大田堯氏の論理を援用し「前向きの不完全さ」の必要を挙げる。それを岩垣氏は「子どもといっしょに『なぜ』を問う仲間なんだという、そういう教師の不完全認識が確かに今日の教育に必要である。¹⁹⁾」と説く。故に岩垣氏は、普及型という知識を伝達する授業の指導を支えてきた、生徒より知識があるとか子どもの前に立ったときの完全意識を教師の権威だと考える考え方を否定する。自分は不完全だという不完全認識は、真理を問いつける姿勢を失わない「前向きの不完全さ」であり、それが教師の権威を支えるとの見解に立つ。教師の指導性を支える権威とは何によってもたらされるのかという事は問いのままでこの論文を結んでいる²⁰⁾。子どもと対等な関係を築く際の指導性に教師の権威が必要であるとは思わないが、教師の側に不完全だという自己理解の必要を述べるところを支持したい。

三番目に、大学の教師として、キリスト者として、司祭として自己理解に苦悩してきた神学者であるヘンリ・ナウエンから、教えるものと教えられるものが相互主体的関係の中で出会うとはどういうことか、またそこでは何が必要かを考察したい。

『差し伸べられる手』は霊的生活、祈りについて書かれている著作だが、その中で彼は、教育を一つの接遇（もてなし）の形と捉えている。教育は、教える者と学ぶものが対立するのではなく、同じ真理を探究しているという信頼関係に立って教師が学生を客人としてもてなす事だと記す。即ちまだ学ぶべき事があると思って自信を喪失している学生に、学生が教えられるばかりでなく、その学生の中に他の学生や教師にも与えるべきものを持っていることを学生が気づけるように助力することだという。このような関係の中で、教師が受容力を持った受け手になることによって、教師は接遇（もてなし）の主人になるという逆説をナウエンは主張する。これは創造的な相互依存であり、命の神秘に出会うあり方だともいう。そこで、このあり方に精神の貧しさと心の貧しさの必要を挙げている。

精神の貧しさは、知性、理性において自分の無知を認める事であるという。どういうことかと言うと、自分の人生は自分を豊かにするために努力が必要だとか、人生は獲得にこそ意味があるという考え方や生き方の方向性を捨てて、人生というものは究極的には神によって知り尽くされていることを受け取るあり方だと知ることが精神の貧しさだという。その理解は、他者への深い関心につながるとナウエンはいう。

他方心の貧しさは、知性、理性の領域を超えて感性、霊性の領域に関わることであり、「他人の経験を自分に贈られる賜物として受け取ることが出来る。」心の動きであるとしている²¹⁾。その心とは自分の経験や体験を規準にして他者や歴史を見るのではなく、他者も歴史も自分の経験をはるかに超えているという認識をもち、自己の卑小さ、狭量さ、不完全さ²²⁾の自覚に立って世界に働く超越した存在、つまり神に向かう心だといえる。

さらに接遇（もてなし）の究極的目標は、欲望を満たすために力と影響力の重要性が強調される現代社会だからこそ、「無駄そのもののうちにある有益さ、無力になることがもつ“力”をささげることだ」²³⁾とナウエンは言い、そのように言える根拠を、他者のために、自己を十字架の死に極まるまで完全に明け渡したイエス・キリストに置いている²⁴⁾。つまりナウエンにとって接遇（もてなし）で示された相互主体的かわりでの学びあいにおいて、教師にとって必要なものは、キリストにおいて示された神の貧しさ、無力さを根拠にした弱さということになる。

では人が価値などまず置くことはない貧しさ、無力さ、弱さが何故必要だと彼はいうのだろうか。その間に対して『傷ついた癒し人』の著作を手がかりに考察したい。この著書は、『差し伸べられる手』以前に記され、その中で既にもてなしという言葉を用いて牧師のミニストリーを説明している。もてなしは他者に注意を向ける能力であると定義されている。他者に注意を向けるために、他者が自然に振舞える場所を作り出せるよう、自己の撤退の必要を示すが、

それは自分が愛から生み出され、神の自由の中で生かされている事に気づく自己への専心だという。牧師のミニストリーは自己の限界や破れや弱さを取り除こうする事ではなくて、それを認め受け容れる事を通して、人生で体験する自分の痛みや傷を分かりあえるものにまで深めること²⁵⁾。即ちそれは存在の根源に誰もが抱える孤独である事に牧師自身が気づき、その上で他者に対して、痛みや傷が癒しの源泉に変わり、希望の徴であり、新しいビジョンの生じる場になる事を告げることが牧師のミニストリーだという。牧師は導き手でしかなく、共同体を創るリーダーではなく、共同体はもてなしのある場から創られるとナウエンは考える。

ナウエンにとって痛みや傷は価値のないものではない。『傷ついた癒し人』の中で彼は、傷について以下のように述べる。傷は、自分がいかに愛されている存在か、他者もまた自分と同じようにかげがえのない存在であるかを気づかせてくれるものであり、自分を知り、他者に気づき他者と分かりあえる道だと言う²⁶⁾。20年後に著された『愛されている者の生活』の中では傷を brokenness という言葉で説明する。彼は傷やその人の苦しみや苦しみの受け方はその人らしさを現すものだとも指摘する。痛みや傷を受けて苦しむ事は裂かれる（broken）事であり、それを見つめる事からさえ逃げたくなるが、裂かれる事には意味があると語りかけてくる。傷や痛みを祝福の下に置いて見つめる時、我々が裂かれるのは、神に選ばれ、祝福され愛されている者として、他者に自分を贈り物として与えるためなのだという²⁷⁾。どうしたらそんなことが可能なのだろうか²⁸⁾。先に述べた

ようにナウエンはその可能性を霊的生活に見出す²⁹⁾。

Ⅲ 結語

聖書の復活物語を通して、生徒は自分の気づきを言葉や絵に表現して意識化し、仲間の気づきに触れて自分の内面を見つめる機会を持った。今回の授業は生徒が自分を見つめ受け入れていく過程において、教師の言葉よりも仲間の言葉や気づきが大きく働いて影響する事が良くわかる事例であり、生徒同士の相互主体的学びの実態を示していた。

更に相互主体的な関係の中で学ぶという事は、教師にとっては、生徒が表現したもの、あるいは生徒たちが表現しない形で伝えようとした事や無意識に感じていることに教師が何を見て、何を聴き、何を感じ取るかが問われているという事も明らかにした。

更にこの事例は、学校における宗教教育とは教理を教える事だけではないことが明確化されたといえる。また聖書を媒介として生徒と教師が自分自身を見つめ、受け容れる事は、宗教教育の経過の一部としてあることが示された。聖書を通して自分の内面をみつめる過程を考えた場合、低学年の小学生は、大抵の場合、自分が変わらなくてはならないとか、自分を変えたいとか、自分を見つめなければならないといった自覚的な積極的意欲的動機をもって聖書を読むことはないと思われる。むしろ聖書の話が面白いから聞いたり、読んだりするのであり、彼らは単純に聖書を楽しんでいる。つまり楽しむことの延長線上に自分を見つめることは起こったといえる。だから聖書の時間で自分を見つめる

ということが起こる場合、それは知性や理性による意見によって惹起されるのではないし、考えろといわれて無理やりに出来ることでもないことがわかる。魂の奥深い所から仲間が発した直感的思いに触れた時、聞いた生徒の心が他者に向かって開かれているならば、仲間の言葉によって、問題や悩みを抱えている自分に気づかれ、静かに無自覚無意識のうちに自分と向き合う事が起こる。本気や本音が、生徒とか教師の立場を超えて聴いた者の心を動かすといえるのではないだろうか。生徒が自分を見つめる時、大人の言葉による影響ではなくて、自分の仲間である生徒の真剣な言葉や一生懸命考えて発せられた思いが、悩みを抱える生徒を揺り動かし、自分を見つめることが起こる。つまり内面を見つめるという事は、教師の介入によらず、生徒同士の間で共鳴し合って起こる事を今回の事例は示したといえる。

また生徒同士の中で起こった知性や理性を超えた響き合いから生まれた洞察は、大人を揺り動かさないわけがない力で教師に大きな影響を与える。換言すれば、生徒の宗教的洞察は教師に多大な影響と感動を与えるということである。有り体に言えば、トマスに差し伸べられた復活のキリストの手は、既に生徒たちに差し出されていて、キリストの手は彼らをつかんでいる。そして生徒たちは、キリストが自分の手をつかんでくださっている事に気づき、それを素直に喜んでいる。その喜び、嬉しさを感じている生徒たちが、未だ心の目を開かれていない教師の手をとって、キリストへと向かわせてくれた。教師自身もまたキリストがご自分の手を差し伸べてくださっていることに、生徒によって

気づかされたということである。

この事をナウエンの著作から振り返ってみよう。学ぶ者も教える者も互いが人生の痛みや傷を受けながら歩む者としての自己理解をもつ時、ぼろぼろの自分でありながらそれでも尚ゆるされ愛されて生かされている自分に気づく。そこから感謝が立ち昇る時、私達は自分へのいとおしさと共に、他者をもいとおしいと思う気持ちと与えられる。そうなった時、私たちは生徒・教師の関係をを超えて、互いが一人の人間として、愛され愛する者同士として出会うことが可能になるのではないかと。別の言い方で言うならば、生徒と教師が、痛みや傷や根源的孤独を隠さず共有し、痛みや傷を担い合う「傷ついた癒し人」として真理の前に謙遜に立つ時、教師は教えねばならない者としての自分から解放され、生徒は教えられる者としての立場から自由になり、互いが独りの人間として支え合い、やり合い、愛し合う者として出会うのではないだろうか。その時私たちは、互いから影響を受け取り合うことが出来る。故にまず、私たち大人が自分の傷や痛み、弱さに対する恐れを捨てることから始めたい。そして大人はもっと素直に子供たちから影響を受けとり、子供たちの靈性に信頼を寄せ、言葉に出来ない子供たちの痛みの傍らに立たせてもらいたいと思う。

最後に相互主体的かかわりの中での学びあいに於いて必要な事をまとめよう。学ぶ者教える者が真理の前で常に学ぶものとして立つと言う事が求められる。更に自分の限界や弱さは、誰もが存在の根底に抱えている普遍的なものであるとの認識に立ってこれを否定しないということである。しかも真理を共に探求する際の姿勢

として、影響を行使するものとして振舞うのではなくて、真理に対して疑問に思った事、うれしかった事、励まされた事、感動した事や苦しかったマイナスと思える事も含め、気づいた事を相互に受け取り合い、分かち合い、担い合うという姿勢をもって真理に向かうという事が必要になろう。そこで大切にすることは、批判的態度ではなく、分かろうとする為の批判的精神を失わず、相手が自分の気づきは大切に受け止められているという実感の中で自由に安心して話せる、ナウエンの言葉を借りるならば接遇（もてなし）の姿勢であろう。それは真理を究明するのみならず真理を生きようとすることであり、共同ではなくて共働者になるという事を意味すると思われる。

以上は小学３年生を対象とした事例であるが、相互主体的に学ぶものとしての姿勢は、初等教育に限らず、中等教育、高等教育においても、また宗教教育や教育の場面に限らず社会にあって人と関わる場において、今後特に道德教育が従来の必修ではなくて教科として始まる³⁰⁾にあたって強く必要なありようである事を確認しておきたい。

資料

①トマスについて

1 これは、トマスが、仲間の事を信じないで、心の鍵（扉）を閉めた所です。イエス様はトマスに「手に指を入れてもいいよ。」と言っているのに、トマスは怒っていた。けれど、トマスは、しばらくしてから、心の鍵（扉）を開けて、イエス様を信じるようになった。

5 ③⑥参照

10 僕はイエス様が現れたと聞いた時、(イエス様って見ているんだなー) と思いました。僕は何で一人だけいないことが分かった時、(いばらんじゃないか) と思ったら当たりました。でもトマスは、勇気を持って買い物に行ったのもすごいと思いました。僕はこの話を聞いた時(大変だなー) と思いました。この他に②④参照

15 トマスがいない時に、他の弟子たちに神様が来たのですが、トマスは、神様にあっていないので、他の弟子たちに怒っていると、神様がトマスの所に来て、神様の指の穴に入れてよいと言ったので、トマスは、神様の手に指を入れた。

16 イエス様がトマスに手をなぜさしだしたのか、不思議に思います。そしてなぜトマスがいない時にあらわれたのか、そして、なぜあらわれたのか、なんでトマスは、うそだうそだしょうこはと言うことをいったのが不思議。②④⑨参照

17 ご復活したイエス様が弟子たちの前に現れた時に、トマスだけいなく帰ったときにはもう 11 人の弟子の心の鍵は開いていて一人の弟子が「おれたちイエス様を見たんだぞ」と行った時にトマスは、とても怒ってしまってもうみんなの意見を聞かずに口答えをしました。③参照

18 トマスはきっとげきどしたんだろうなー。僕がイエス様だったら入れた瞬間になぐりかかりそうだな。僕は気が短いからなー。イエス様はどうだろう。⑨参照

19 僕は、トマスは、本当はイエス様の指の穴に、突っ込みたくないけどわざとそういったと

思う。それかトマスは、自分だけイエス様のご復活を見られなかったから負け惜しみを言いたかったのかもしれない。イエス様は、手の穴にトマスの指を入れて弟子たちを伸直りさせたかったのかもしれない。⑦参照

22 トマスは、イエス様が生きてると信じたかった。でもパウロみたいに心の鍵と心を開いて、いれかわれるなんてやっぱりすごいと思います。やっぱり人の心をかえるイエス様はすごいです。イスラエルの皆さんは勇気溢れて親切で、正直者でとにかくとてもすごいです。僕もなれたらいいな。②参照

23 ②⑨参照

25 ②⑨参照

26 トマスがなくて、なくて、いかりくるっている絵です。そしてトマスはそれをきっかけに、自分の「心」のトビラに「かぎ」をかけてしまったところが印象に残りました。

28 僕が印象に残った話は、イエス様が十字架につけられた後、弟子たちが家の鍵と、心のかぎ全部の鍵を閉ざしてしまって、隠れていたという話です。そして何日か後にイエス様が来られて、トマスがイエス様の手の穴に指を入れた後、トマスの心の鍵が開いてよかった。

29 トマスが、心の中に鍵をかけてしまい、イエス様が鍵を開けるためにくぎあとを見るときをかきました。トマスは、イエス様が、十字架にかかったときにくぎを刺されたので、そのくぎ跡に、見るのではなくていけると心の鍵があくときいたので、びっくり

しました。何で、ドアに鍵穴がないかびっくりしました。②⑧参照

31 トマスは、イエス様が十字架に付けられた日、弟子たちと一緒に家に鍵をして一緒にいなかった。僕は、何でいなかったのかは分からないけどよそうは、怖かったからだと思います。ご復活のイエス様の体を見なかった体と思います。トマスはすごい人です。

32 トマスさんは、最初全くもってイエス様を信じていなかったけれどイエス様の手首に（手のひらも）自分の指を入れてみたら本当だとトマスさんは、思っやっってトマスさんは、信じる（イエス様を）事が出来ました。トマスは、心を閉ざしていたのに……イエス様の力は、すごいな～…と思いました。②⑨参照

33 トマスは弟子たちの言う事を信じなかった。なぜなら、トマスが出かけている時にイエス様があらわれたからおかしいと思ったからだ。さらに、本当のイエス様か、というのは本当のくぎのあなかどうかということだ。しかし、トマスがイエス様の手のあなに自分の指を入れたところ、本当にあなに入った。ということは本当のイエス様だったという事だ。

38 トマスは、でかけてる時イエス様が来た事をしんじなくて、復活された事をぜんぜん信じなかった。けれども来ても信じなかった。そして「手にあいてるあなに指をいれないとしんじない。」と言ったので、いれたら少ししんじはじめた。トマスは、本当はいい人だと思う。だから信じた。

43 ②⑤参照

46 僕はトマスのお話が心にのこっています。

トマスは仲まの弟子たちにイエス様がよみがえったときいたけどトマスはうでにゆびをつっこまないと信じなかった。

47 イエス様が十字架にかかってからお弟子さんの一人がイエスのことを信じなくなりました。ところがある日イエスが天から下りてきてこう言いました。「私の手のきずをさわりなさい。」といわれてさわりました。そしてきゅうい心がかわりあんなにキリスト教を信じなかったのがとてもキリスト教を信じた。と言う話です。

48 ②参照

53 ぼくは、トマスがイエス様のくぎあとにゆびを入れているところをかきました。ゆびを入れたトマスが心をいれかえ、うらぎり物（マ）からやさしい人にかわったという出来事です。ぼくは、このお話がおもしろかったので、えらびました。ぼくは、このお話がとても好きです。もっとせい書のはなしをききたいです。

54 ②⑦参照

②イエスについて

2 イエス様が来た時に、みんなが明るくなった。イエス様は、それほど大切な存在なんだなあという事が分かった。それなら、トマスが怒った意味もわからなくはない。トマスが、イエスさんの釘の穴に自分の手を入れるのは、心のドアを開ける鍵で、イエス様の手のくぎ跡は、鍵穴だと思った。イエス様は、くぎの穴に入れさせてくれたの

は、トマスの心の鍵穴だと知っていたから
だと思う。この他に④参照

- 4 僕は憎しみ・悲しい事をイエス様に預ける、
イエス様銀行の絵をかきました。色々な人
がイエス様の手の穴に指を入れることで憎
しみや悲しみから解放されるのだと思いま
す。そして、新しくいい心に変るのだと僕
は先生のお話を聞いていて思いました。僕
は一度イエス様に会ってみたいです。この
他に⑧参照

- 6 この絵は、トマスがご復活したイエス様の
指の穴に手の指を入れようとしている所で
す。この時僕は、心の鍵穴だったし、イエ
ス様の身体があるのか、決めるための証明
するものであったのではないかと思った。
イエス様は「シャローム」と言って出てき
たから、幸せにしたかったんだと思った。
この他に⑧参照

- 9 この絵は、トマスがイエス様に「人が言っ
たことは、その人のことを見なくてもその
人の事を信じる人は幸いである。」と言っ
ていた時の絵です。イエス様はトマスに向かっ
て、私（イエス様）の指の穴と脇腹にあな
た（トマス）の手と指を入れなさい。と言っ
たところがすごくやさしいと思いました。

10 ①④参照

11 ③⑧参照

12 ④⑥参照

- 13 トマスは、イエスのくぎの穴に、指を入れ
ないと信じないと言ったが、イエスは自分
の手の穴に入れさせたのは、なんでだろう？
またそれは、僕の考えは、きっとトマスは、
主を信じる人になってほしいからだと思う。

でも、それは、痛かったと思う。⑦⑧⑨参
照

16 ①④⑨参照

- 18 僕がイエス様だったら入れた瞬間になぐり
かかりそうだな。僕は気が短いからなあー。
イエス様はどうだろう。

- 20 心に残った聖書のお話は、イエス様がトマ
スにくぎで指した跡を指に入れるところだ
す。痛いのに何でさすのかがよくわかりま
せんでした。びっくりしました。だいじょ
うぶかなーと思いました。怖かった。とて
もすごくやばいと思いました。ぜったいぜっ
たいぜったい痛いとは僕はそう感じました。

22 ①参照

23 ①⑨参照

25 ①⑨参照

- 27 トマスが心にかぎをかけてしまって、かぎ
をあけるためには、イエス様のうでや、手
の穴に手を入れなければだめだと言ったこ
とにたいして、イエス様は、いいよと言って、
トマスは、うでや手のくぎあとに手を入れ
た。イエス様は、やさしいと思ったし、ちょっ
とうでがいたそうでした。

29 ①⑧参照

32 ①⑨参照

- 34 イエス様がなぜ、トマスのいない事を分かっ
ていつつ、お弟子さんの前にあらわれたか
が、今でも不思議です。

- 36 家のかぎや心のかぎがかかっている弟子さ
んたちだけれど、神様はゆるしてくださっ
た。とくにトマスさんの、心のかぎが、イ
エス様がいらっしやらなかったら、あかな
かったと思いました。そんなお弟子さんた

ちに、自分の手（イエスの手）に入れていいと思ったイエス様は、本当にすごいと思いました。たぶん痛かったと思います。

41 イエス様は、トマスの悪い心を受け入れてくれた。⑥参照

42 イエス様が、心の戸をひらいてもらうために、自分で「指をいれなさい。」と言った時に、イエスさまと手の穴が、かぎあなになってトマス指がかぎに変わった気がした。イエス様は、やさしく人の事を気にする、やさしい心をもっているなと思った。僕もイエス様見たいなやさしい人になりたいです。

⑤参照

43 ①⑤参照

44 トマスがイエス様の手の穴に指を入れ、本当のイエス様かどうかたしかめている所。これは、トマスが閉めてしまった心のかぎ穴を、今、開く時なのです。イエス様は、自ら「私の手の穴に、ゆびを入れなさい。」と言ったのです。トマスの心が閉じているのを分かっていたのです。トマスが信じてくれると、信じていたのです。

45 僕はイエスさまがトマスの心をこじ開けた所がすごくいんしょうにのこりました。

イエス様が二回目に来た時トマスに「トマス、私のわきばらに指をいれてみなさい」と言いました。そしてトマスがわきばらに指を入れてトマスの心のとびらが開いたのです。良かったなと思いこの出来事を書きました。

48 僕は、イエス様が殺されたことに、胸がいたくなります。ですが弟子たちが、こもっていると、ご復活なさったイエス様がありました。

そこにトマスがいませんでした。そこでトマスに会いに行き、手をみせてました。そのあとは、くぎ穴です。死けいにされた時のあとです。そのあと、トマスは、イエス様を信じる人へかわりました。①参照

49 トマスに、十字架にかかったあとのいたいきずあとに「トマスこのきずあとにゆびをいれていいよ」と言ったのがすごいと思いました。いたいくぎあとにゆびをいれることをゆるすイエスさまのそのゆう気が…。さすが神さまの子どもイエスさまだと思っています。ほくは一どイエスさまに会ってみたいです。

51 弟子たちは、イエスさまが死んで、こわくなりへやにとじこもって心にかぎをかけていました。でもそこにイエスさまがあらわれ「平和があるように」と、言われました。それから、わきばらと手を見て弟子たちはよろこびました。ほくは、イエスさまは、心のかぎをあける力があってすごいと思いました。④⑤参照

54 ①⑦参照

③トマス以外の弟子たちについて

5 僕が、聖書のお話で心に残ったお話があります。それは、トマスがいない時に、イエス様にご復活されたというお話です。それでそのお話を聞いたトマスが信じなくて、とトマスの心の中のかぎが閉まってしまったのです。それでも、違うイエス様弟子が心の中を開けようとした。この他に①⑥参照

7 ⑥参照

8 さいしょはみーんな（トマス以外）くらかっ

たけどイエス様が来た時にみーんな（トマス以外）明るくなったんだなー。僕だったらイエス様が見えたら、明るくなるどころか、信じられなくて、言／（途中）④参照

11 ②⑧参照

17 ①参照

④イエスが現れた時について

2 ②参照

8 ③参照

10 ①②参照

12 ②⑥参照

14 ⑤参照

16 ①②⑨参照

51 弟子たちは、イエスさまが死んで、こわくなりへやにとじこもって心にかぎをかけていました。でもそこにイエスさまがあらわれ「平和があるように」と、言われました。それから、わきばらと手を見て弟子たちはよろこびました。ほくは、イエスさまは、心のかぎをあける力があってすごいと思いました。

⑤戸にかぎをかけることが意味することについて

14 この絵は、弟子たちが、戸に鍵をかけている絵です。僕は、心にも鍵をかけてると思います。その時、イエス様が出てきたときの絵を描きました。④参照

24 イエス様の弟子たちの家の鍵を全て閉めて、ユダヤ人に見つからないようにしていた。でもイエス様はご復活されてこの家に現れた。暗い中で隠れていた。その時にトマスのみでかけていた。もう食べるものを食べ

たくてしかたがなかったから。トマスが帰ってきてイエス様の手の穴に指を入れた。

30 僕の一番心に残ったお話は「鍵のかかっている部屋」のお話です。僕がこのお話を聞いて思ったことは、部屋だけでなく心までかぎをかける必要は本当にあったかなです。僕だったらそこまでロックしなかったと思います。お城のとびらくらいのロックをかけちゃうなんて・・・。

42 イエス様が、心の戸をひらいてもらうために、自分で「指をいれなさい。」と言った時に、イエスさまと手の穴が、かぎあなになってトマス指がかぎに変わった気がした。②参照

43 トマスが心にかたくカギを閉めて、イエス様のくぎあなに指を入れて心のかぎのかかったとびらが開けたことがすごかった。トマスのとびらはイエス様のくぎのあながトマスの心のかぎあなだったからすごかった。①②参照

51 ②④参照

⑥心にかぎをかけることが意味するものについて

3 悲しくなったりすると心にかぎがかかってしまうんだなと思いました。毎日笑顔で元気だと心にかぎがかからないと思うので笑顔で元気にいつもいたいです。

5 ①③参照

7 弟子たちはイエス様が十字架にかけられてしまっってそんなに悲しいんだなあーと思いました。なので心の扉の鍵を閉めてしまったのかなあーと思いました。僕はそんな悲しいことは無かったけど昔の人は悲しいこ

とがたくさんあるんだなと思いました。それに心の扉を閉めてしまうという事はそうとうイヤなんだろうな。③も参照

12 この絵は扉と心に鍵を閉めてしまった物語りです。イエス様がいなくて「どうしたらいいんだ」「……」そしてトマスもいなくなって扉どころか心にみんな鍵をかけてしまった。その時イエス様が扉にかかっている部屋に入ってきた。みんな勇気を取り戻したので良かった。この他に②④参照

26 トマスがなくて、なくて、いかりくるっている絵です。そしてトマスはそれをきっかけに、自分の「心」のトビラに「かぎ」をかけてしまったところが印象に残りました。

41 イエス様は、トマスの悪い心を受け入れてくれた。②参照

⑦イエスは何故ご自分の傷跡にトマスの指や手を入れてよいと言ったのかについて

6 この絵は、トマスがご復活したイエス様の指の穴に手の指を入れようとしている所です。この時僕は、心の鍵穴だったし、イエス様の身体があるのか、決めるための証明するものであったのではないかと思った。イエス様は「シャローム」と言って出てきたから、幸せにしたかったんだと思った。

13 トマスは、イエスのくぎの穴に、指を入れないと信じないと言ったが、イエスは自分の手の穴に入れさせたのは、なんでだろう？ またそれは、僕の考えは、きっとトマスは、主を信じる人になってほしいからだと思う。でも、それは、痛かったと思う。②⑧⑨参照

19 イエス様は、手の穴にトマスの指を入れて

弟子たちを仲直りさせたかったのかもしれない。①参照

35 なぜイエス様は、「わたしの手の穴に指を入れてもいいよ」と言ったのか僕は、トマスに事実を教えるために言ったのかなあーと思いました。僕がイエス様だったら言えないと思いました。聖書は意外と面白いと思いました。

54 イエス様の手のひらにイエス様が「わたしの手のひらのくぎあなにゆびを入れてみなさい。」と言ったのはトマスに人をしんじてほしいというイエス様の思いでトマスのかぎあなにかかったかぎをといてくれたのだと思っています。トマスはイエス様のおかげでこうゆう人になったと思います。①②参照

⑧イエスの傷跡に指や手を入れることが意味するものについて

4 僕は憎しみ・悲しい事をイエス様に預ける、イエス様銀行の絵をかきました。色々な人がイエス様の手の穴に指を入れることで憎しみや悲しみから解放されるのだと思います。そして、新しくいい心に変るのだと僕は先生のお話を聞いていて思いました。僕は一度イエス様に会ってみたいです。この他に②参照

6 ②を参照

11 この絵は、イエスさんの弟子たちが、鍵のかかった家で、「僕たちはこれからどうすればいいんだ」と落ち込んでいると、家に、イエス様が現れて、みなさんに、よみがえった証拠に、くぎ穴もみんなにみせているところです。僕は、十字架にかかったのに、

よみがえってあらわれるというのは、僕が弟子の一人だったら、とても嬉しいです。

この他に②③参照

13 ②⑦⑧⑨参照

29 ①②参照

41 イエス様は、トマスの悪い心を受け入れてくれた。

⑨疑問や感想

疑問

13 ②⑦⑧参照

16 ①②④参照

25「トマスは、イエス様を疑っていたのになぜイエス様は、指を入れていいといったのだろう。」とずっと不思議に思っていました。でもトマスの心が開いてよかったと思います。①②参照

35 なぜイエス様は、「わたしの手の穴に指を入れてもいいよ」と言ったのか僕は、トマスに事実を教えるために言ったのかなぁーと思いました。僕がイエス様だったら言えないと思いました。聖書は意外と面白いと思いました。

37 トマスは何でイエスさまが復活した事を信じないで、くらくなったのか。またなぜ、みえないとびら（心のとびら）に手でかぎをしめたのか。僕はそのなぜがわからないです。トマスはなんで、くらくてこわくてかなしい気もちになったのか。

その他感想

18 ①参照

21 このお話はとってもいたそうでした。イエス様はせっかく復活してくださったのに、

トマスが指を入れたから、また痛い思いになったと僕は思います。でもイエス様は自分から「指をここに入れて、信じないものではなく、信じる者になりなさい。」と言っていたのでいたくてもしょうがないと僕は思います。

23 トマスはいなかったけど、他のお弟子さんたちが、ガーンとしているのをシャキッ！とさせたイエス様はすごい！！トマスがいた時に、トマスだけが閉めていた心の扉をイエス様は自分の手首と脇腹をお見せになったのをトマスはやっと分かる人になって信じる者になって広める人になり、ほっとした。①②参照

32 ①②参照

50 3年生になってきた話はイエスさまが手のあな、足のあなにゆびを入れなさいという話です。ほくは「きもちわるい」と思いました。ほくは「よくイエス様はゆるしてくれるな」と思いました。「どんなのかな？」

52 トマスが、イエス様のくぎ穴にゆびを入れる時は、気持ちわるいと思った。でも、それでトマスの心のカギがあげられてよかったと思った。イエス様を信じないのが、やっと思えてもらえて、とてもよいと思った。

53 ほくは、トマスがイエス様のくぎあとにゆびを入れているところをかきました。ゆびを入れたトマスが心をいれかえ、うらぎり物（マ）からやさしい人にかわったという出来事です。ほくは、このお話がおもしろかったので、えらびました。ほくは、このお話がとてすきです。もっとせい書のはなしをききたいです。（未完）

39 トマスは一人だけ家にいなかったのもそれが
分からなかったのです。イエス様は本当は十
字架にかかって、手首とわきばらに釘／（未完）
40 かぎのかかった家にあらわれたイエス様。
イエス様の手にあながあいているのでトマ
スがその手の／（未完）

参考文献

（著書）

H. J. M. ヌーエン『傷ついた癒し人』（西垣
二一・岸本和世訳）日本基督教団出版局
1981 年
パウロ・フレイレ著『伝達か対話か－関係変
革の教育学』（里見実ほか訳）亜紀書房、
1982 年
速水敏彦著『新約聖書 私のアンゲル』日本聖
公会東京教区、1985 年
レイモンド・E・ブラウン著『キリストの復活』
（佐久間勤訳）女子パウロ会、1997 年
ヘンリ・J・M・ナウエン『愛されている者
の生活－世俗社会に生きる友のために』（小
淵春夫訳）あめんどう、1999 年
木田献一著『古代イスラエルの預言者たち』清
水書院、2002 年
ヘンリ・J・M・ナウエン著『差し伸べられる手』
（三保元訳）女子パウロ会、2002 年
ヘンリ・J・M・ナウエン著『最後の日記』（太
原千佳子訳）女子パウロ会、2002 年
ヘンリ・J・M・ナウエン著『心の奥の愛の声』
（小野寺健訳）女子パウロ会、2002 年
ヘンリ・J・M・ナウエン著『静まりから生
まれもの』（大和田功一訳）あめんどう、
2004 年

広岡義之著『フランク教育学への招待』風間
書房、2008 年

大塚野百合著『あなたは愛されています ヘ
ンリ・ナウエンを生かした言葉』教文館、
2009 年

大貫隆編著『イエス・キリストの復活 現代
のアンソロジー』日本基督教団出版局、
2011

岩島忠彦著『イエス・キリストの履歴』オリエ
ンス宗教研究所、2011 年

山我哲雄著『一神教の起源 旧約聖書の神はど
こからきたのか』筑摩書房、2013 年

渡辺和子著『面倒だから、しょう』幻冬舎、
2013 年

平山正実篇著『ヘンリ・ナウエンに学ぶ』聖学
院大学出版会、2014 年

（事典）

馬場嘉一編著『聖書大辞典』キリスト新聞社、
1988 年

高柳俊一篇著『新カトリック大辞典』研究社、
2009 年

上田亜樹子編著『立教人のためのキリスト教
小事典－聖公会の視点から－』立教学院、
2011 年

（論文）

岩垣攝「相互主体的な授業と教師の指導性－新
しい学習観の検討－」千葉大学教育学部
研究紀要 第 43 巻 1995 年

1) ルカによる福音書 24 章 11 節参照。ここでルカは、
イエス・キリストの弟子でありながらイエスの
十字架の死に際してイエスを裏切った弟子たち

を単に「弟子」と表現せず「使徒」と表現している。ルカによる福音書における「使徒」と言う単語は6章13節に出てくる。イエスが直々に12人を選び、「使徒」と名づけたとルカは記し、彼らは宣教と癒しのために派遣される。ルカ福音書より成立が古いコリントの信徒の手紙（1コリント12：28）を見ると、「使徒」は教会の第一に挙げられる立場である。その他エフェソ書2：20では教会の土台のひとつとして「使徒」が挙げられ、教会の基礎となる存在であることがわかる。ギリシア語の元来の意味は「派遣されたもの」である。イエスによって全権を委任されて遣わされる存在が「使徒」である。教会の要となるべき人たちが復活を「たわ言」と捉えたとルカは記す。ちなみに新共同訳では「たわ言」。口語訳では「愚かな話」となっている。原語は $\lambda \eta \rho \omicron \sigma$

- 2) 本文の言葉はカトリック教会の信仰宣言（使徒信条）による宣言。聖公会は「死人のうちからよみがえり」、プロテスタント（日本基督教団など）は「死人のうちよりよみがへり」と告白する。実施校は「よみがえり」と記された信仰告白を用いて礼拝している。「復活」も「よみがえり」も同一の事を指し示している。
- 3) 相互主体的学びについての宗教的意味合いについては、拙論『『聖誕劇』制作の試み－聖書の読み方へのチャレンジ（1）』立教大学 学校・社会教育講座 教職課程『教職研究』第24号 p.57～72を参照されたい。
- 4) 読書科ではイースターに関連する本、英語科でもイースターに関連する英語の本や英語の歌など、図工科、生活科などでもイースターを題材に授業で取り上げている。

- 5) プロセッションチームとは、礼拝をリードする礼拝奉仕者団のこと。十字架を持つチーム、トーチを持つチーム、聖書朗読のチーム、校旗を持つチーム（6年生）が高学年、低学年それぞれに編成されている。
- 6) 礼拝奉仕の心得として「単なるお当番ではなく『神様のお手伝いのために』という理解で、仲間と一緒に一生懸命、聖書朗読の準備をし、クロス・トーチを手にして、プロセッション等々の練習をしています。礼拝の直前には（中略）『心を合わせて豊かな礼拝をおさげすることができますように、わたしたちをお導きください』と祈ります。そこに、神の業に心を向ける仲間同士の純粋な思いによる、豊かでそして理想的な礼拝の姿があるように思われてなりません。』（『立教人のためのキリスト教小事典』p.86より引用）とある。
- 7) 大齋とはレント、四旬節、受難節ともいう。大齋については以下のチャブレンたちの意見が参考になる。「大齋という季節が、克己・自制・痛悔を通して、自分に注がれる神様の深い『愛』を知らされた時であることを忘れてはならない。古くから『大齋を失う者は一年を失う』と言われている。神様の愛を知らされる為のこの季節」（チャブレン 柳本博人 P T A通信 No. 2704 2012年3月8日）であると言われている。また「神に対しての祈り、自分自身に対しての節制、更に他人に対する慈善の三つが伝統的に行われてきました。自分に足りないところをみつめ、励みに行う大切な期間とお覚えください。」（チャブレン 小林宏治 P T A通信 No. 2737 2013年2月15日）とある。「大齋はげみ表」とは、イースターまでの日曜日を除いた40日間毎日取り組む表のこと。何故40日かというと、イエス・キリストが宣教に出る前、

荒野で40日間断食をして悪魔の誘惑と闘ったことに由来する。主イエスのこの戦いに倣い、自分中心の心と戦う事にチャレンジし、他者のために働く事を目的とし、自分で目標を決め、この目標に沿って神のため、人のために努力することで神様の愛に応じて生活する事を意識するための表。目標を表の所定の位置に書き込み、よく出来た日は○中くらいの日は△良くできなかった日は×を書き入れる。

- 8) 大斎期間中イエス・キリストの苦難を思い起こし、神と隣人に仕えるため何かを我慢したらその分を献金として献げる。子供たちと保護者の方への奨めとして、神様と自分以外の人のために時間と労力をささげる事をお手伝いすることで表し、特別なお小遣いを頂いて献金する方法もある事を伝えている。これはイースター礼拝でお献げする。
- 9) 同じ質問を体で表現してみてくださいと他のクラスで言ったところ、一人の生徒が「やったあー！」と飛び上がって喜びを表したら、他の生徒たちも立ち上がって飛んだり、はねたり。みんなに共通していたのは、ニコニコの笑顔。照れて立ち上がらなかった生徒もニコニコ。嬉しさを表現していた。
- 10) イエス・キリストのご復活に出会った者は新しく変えられるというメッセージや神様が僕たち人間や人間以外の命をお造りになって、神様が僕たちを生かしてくださるという事が常に明確に根底にあるチャブレン（柳本博人師 2002～2011 年度在職）によるメッセージを日頃より礼拝の中で聞き、聞いた事を生活の中でどう生きるかと言う事を学校全体で考え取り組んでいる姿勢による影響がないとはいえないと思われる。参考に過年度のご復活に関する生徒の気づきを資料として以下に載せ

る。以下の気づきは、ご復活を身体の新命として考える視点はなく、心に関わる出来事として捉えているところや新しくされるという点に年度を越えた共通点が見られる。

2007 年度 ご復活の意味を考える

（3 年生の意見）

- ・古い心を捨てて新しい心を誕生させることだと僕は思います。
- ・あたらしい命が始まる日のご復活だと思う。
- ・新しい姿に生まれ変わって、イエス様が僕たちを見守ってくれて、いつもと一緒に過ごして下さるということだと思う。
- ・イエス様がこの人たちを赦してくださいと神様にお願いしたことに対して、神様がそれに応えて人間を赦してあげて、イエス様を復活させてくれた。
- ・イエス様が生まれ変わって、僕の心の中にいてくださるということ
- ・新しい自分に生まれ変わるという事。
- ・神様が新しい心と体でよみがえること。
- ・新しいものに生まれ変わる事。
- ・生きる希望を伝えるもの。
- ・新しい姿になること。
- ・ご復活とは、心の向きが変わること。
- ・心も体も変身すること

2008 年度 エマオ途上についての学びでの話しあい （2 年生の意見）

- ・なんでパンを裂く時イエス様だって気づいたの？
- ・聖書の話を書く時、普通はイエス様だって気づくじゃん。
- ・パンを分けて頂いた時、イエス様の優しさを感じたんじゃないのか。

- ・悲しんでいたお弟子さんたちを元気にしてあげたくてイエス様はあらわれたんじゃないのかな。
- ・それならなんでパンを食べたときえちゃったの？
- ・お弟子さんたちがイエス様だって気がついたからじゃないの。
- ・神様の力でイエス様が消えた。
- ・お弟子さんがイエス様だって気がついた時、目に見える形でもう一緒にいる必要がなくなったから、消えたんだと思う。
- ・心の中にいてくださるって気づいたからだと思う。
- ・何故エマオに行ったの？（ここまでは2Cの会話）

(他のクラスの2年生の意見)

- ・悲しい時現れて嬉しい時消える
- ・イエス様ってガソリンスタンドみたい。ガソリン入れてもらったらもうガソリンスタンドにいる必要ないでしょ。悲しい時にイエス様は慰めてくれて、嬉しい時イエス様が見えなくても大丈夫だから。

2009年度

(ルカによる福音書24章13節以下 エマオ途上)

☆16節「二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった」との意味について

三年生の気づき

- ・イエス様の事を話していて、夕方で暗くてよく顔も見えないし、突然人が近づいてきて頭が混乱した。
- ・イエス様は死んだと心に刻み込んでいたから、前ならイエス様を見る目があったのに心の目をふさいだ。
- ・三日目に復活すると言われたイエス様の言葉を悲しみに忘れてしまったから。
- ・復活するわけがないと思っていたから、悲しみで一杯で心の目が見えない。
- ・エルサレムから逃げることで精一杯で自分の事で

頭が一杯だったから。

- ・自分のことしか考えられないからイエス様の言葉を思い出せない。

☆ご復活のイエス様に会おうということはどういうことかとの質問に対する答え

二年生の気づき

- ・悲しいとき、諦める心から勇気を持つ心や頑張る心に変えられる。
- ・やりかえす心からやり返さない心

11) 復活をテーマに選んで感想を書いた生徒は120人中54名

12) 個々の項目に対して考察すべき所だが、それは別の機会にする事として、ここでは分類した感想を最後に資料としてのせる。文脈の中で理解する必要があるため分類に際しては重複がある。

13) この生徒の作文は資料22にあたる。①②参照。

14) この感想の作文は資料⑨の50、52参照。

15) この感想の作文は資料⑨の53、35参照。

16) しばらく経って上記の生徒が人間関係に悩む時期があったことを知らされた。絵を見たその時この絵の洞察の深さに感嘆こそすれ、生徒が何か抱えているのだろうかとの問いや関心を持つ事を怠ってしまった。その事への悔恨の体験が本論を試みたことの根本にある。

17) パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』79～84

18) 岩瀬「相互主体的な授業と教師の指導性—新しい学習観の検討—」千葉大学教育学部研究紀要第43巻 p.110 引用

19) 同論文 p.111 引用

20) 同論文 pp.110

21) ヘンリー・ナウエン『差し伸べられる手』p.138より引用

22) 同書 p.138 では「矮小な感覚」と翻訳されている。

23) 同書 p.141 より引用

24) 同書 p.100～142

25) ナウエンにとって自分の痛みや傷を分かりあえるものにまで深めるということは、自分以外の人に自分痛みをさらけ出して告白して誰かに分かってもらうとか、慰めてもらうというレベルではない。これは、自分の傷や痛み苦しみは神以外には癒すことの出来ない、誰にも癒すことが出来ない、存在の根源的孤独であると知る事を意味する。

ナウエンにとっての solitude（「独り静まる」とか「独り」と翻訳されている）に当たるものはシスター渡辺和子氏にとっては「聖所」（sanctuary）に当たるかもしれない。彼女の著『面倒だから、しよう』の中で「聖所とは、ほかの誰にも土足でズカズカ踏み込ませない部分。死ぬまで誰にも言わないでお墓まで持っていく、裏切られてもそこに逃れることができる最後の砦のようなものを持つのです。（中略）理解しあうことが出来ない悲しみをわたしは聖所の中に納めています。」（p.75,76 引用）と述べ、誰にもいえない理解し合えない孤独が秘められている魂の奥深くを聖所と名づけている。ナウエンにとっての solitude やシスター渡辺にとっての聖所は、悲しみに満ちた人間の魂を指すが、そこには神が、イエス・キリストが、必ずおられる場所であり、人間が降りていくのを待っていてくださる所としての魂と言える。

26) H. J. M. スーエン『傷ついた癒し人』（西垣二一・岸本和世訳）日本基督教団出版局 1981 年 p.126～135 もてなしの考え方は『差し伸べられる手』の中で、より具体的形となって記されている。

27) ヘンリ・ナウエン『愛されている者の生活－世

俗社会に生きる友のために』（小淵春夫訳）あめんどう、1999 年 p.93～114 この著作は 1992 年にアメリカで出版されている。その中でナウエンは、ご聖体すなわちキリストのからだであるパンに対するユーカリスト（聖餐式）の中で 4 つの所作（取り上げる Taken・祝福する Blessed・裂く Broken・与える Given）を通して、私たちの人生における苦悩に意味があることを解き明かしている。1996 年に書かれた『最後の日記』の中に「傷」についての言及があり「この痛みは、私の救いへの入り口、栄光の扉、自由への通路かもしれない！この傷は、傷のかたちを借りた恩寵だということを、わたしは知っている。」と書いている。さらに 1998 年にアメリカで出版された『心の奥の愛の声』では「自分の孤独感自分のユニークな才能の一つの表れだと思えるようになることがある。心の奥の奥でこの真理にふれたならば、孤独感、耐えられるどころか実り豊かなものにさえなるかもしれない。そうなれば、始はやりきれない気がしたものが、辛くはあっても、神の愛を一段と深く知る道をひらいてくれる気持ちに転化するかもしれない。」（同書 p.52～53 引用）とある。傷は自分を苦しめ追い詰めるものではなく、新しい自分へと解放してくれるものとの確信が揺れながら深まっていることが見られる。

28) 大塚野百合氏のご自身の著書『あなたは愛されています』の中で、ナウエンの『差し伸べられ手』を紹介しながら教師と学生の関係について慧眼鋭い見解を述べている。ナウエンのいうもてなしの関係から生まれる教師と学生の間の信頼関係は、「教師は、ただ教えるだけではなく、学生から教えられて、豊かなものを与えられる」（『あ

あなたは愛されています』p.67引用) 関係であり、この関係は宗教教育において必要なもので、学生が宗教教育に無関心である理由を「学生たち自身が経験していることに教師が関心を払わないからです。キリスト教の教理を高めから教え込もうとするからです。」(同上) と看破している。教師の関心がどこにあるか。自分の教えようとする教科や研究にあるのか学生に対してなのか、学生を分かろうとして関心をもって真剣に関わろうとしてるかが問われている。本稿の課題をずばり指摘されているように思う。

- 29) ナウエンにとって霊的生活は孤独 (loneliness) から独り (solitude) になることだという。その事を『静まりから生まれるもの』の作品の中で以下のように述べている。「独り静まる中で、誰かを愛そうとするずっと前にわたしたちを愛してくださる方の声が聞こえるようになるのです。この静まりの中でこそ、何を持っているかより、生きている自分の存在自体が大切であること、また、努力した結果より、わたしたち自身のほうがはるかに尊いことが分かってくるのです。独り静まる (solitude) 中で、わたしたちの命は、奪われないように守るべき所有物ではなく、他の人と分かち合うべき賜物であることに目が開かれてきます。(中略) わたしたちの命は、しがみつくべき所有物ではなく、受け取るべき贈り物であることが分かってくるのが、この静まりにおいてなのです。」(p.28～29引用) とある。ナウエンはキリスト教の信仰生活をしているので、独り静まる (solitude) ことは、神の前に出て神と一対一で出会う中であなたは愛されている、ありのままでそのまま良いのだとの御声を受け取る事を指しているといえる。つまり神

と共にある独りということになる。

- 30) 『教職研究』第24号における拙論「『聖誕劇』制作の試み - 聖書の読み方へのチャレンジ (1)」
p.65 本文の最後のパラグラフにある「道德の授業が必修化されようとしている中であって」は誤りで「道德の授業の教科化」に訂正。